

日独文学にみる「核」の表象についての比較考察

依 岡 隆 児

(徳島大学)

A Comparative Study of the Depiction of “Nuclear Energy” in Japanese and German Literature

Ryuji YORIOKA

Tokushima University

Abstract

Unlike Germany, which has vowed to shut down all its nuclear power plants in the wake of the Fukushima disaster, the Japanese administration is still much dependent on “nuclear energy” even today. Thus, the aim of this study is to compare and examine how the issue of “nuclear energy” is treated by writers in these two countries that have shown such staunchly different approaches.

This study has focused on discussions and discourses regarding “nuclear energy” found in post-World War II literatures in Japan and Germany. In particular, differences were drawn and further analysed from discourses between prominent German and Japanese writers such as Günter Grass, Shohei Ooka, Kenzaburo Oe, Makoto Oda, and Hiroshi Noma. By doing so, the study hopes to find a possible solution to this global crisis within the realm of literature.

The result indicated that, when compared with their German counterparts, Japanese writers were more introversive and prudent in nature, possibly weighted down by a deep sense of victimisation and a strong accountability toward the war, which then prevented them from sufficiently taking into consideration the cross-boundary and bipartisan nature that characterises the nuclear issue.

1. はじめに

日本が原爆投下と福島原発事故を体験してなお、原発を廃炉することなく再稼働させようとしているのに対して、ドイツは原発の全廃を決定して、いち早く代替エネルギーへの転換を図った。こうした両国のあり方に、それぞれの国の文学はどう関わってきたのだろうか。本論は、日独文学者

たちによる「核」をめぐる対話の比較から、文学と「核」との関わりを考察するものである。

日独対話・比較考察というと、両国が共有する過去の過ちの反省から、ともにこれからのグローバル社会の発展に貢献しなくてはならないことを、参加者たちが確認し合ったという風にまとめられがちである。だが、そうした日独同調論とは裏腹に、両国における戦争や現代社会へのスタンスには厳然たるずれがある。従来、そうした対話におけるずれが、対話者自身も気づかぬまま、見過ごされてきたがゆえに、せっかくの両国文学者の対話も議論がかみ合わず、月並みな外交辞令で終わることがあったのではないか。実際、それぞれの国の作家が相手国の作家のイメージに固執して、その言動を曲解するということもある。たとえば、ギュンター・グラスは左翼作家で、反戦平和主義者であると日本では見なされてきたため、彼が1999年のEUによるコソボ空爆に支持を表明したときには、日本の知識人の多くは失望し、グラスの右傾化、あるいは当時与党だった彼の支持する社会民主党への迎合と見なした。しかし、グラスはひとたび連邦軍が設けられてからは、兵士を「市民の兵士」とするためには徴兵制は必要だとしていたし、徴兵忌避者による代替社会奉仕活動も高く評価した。そもそも彼は戦後ドイツにおける「戦う民主主義」を標榜してもいたのである。にもかかわらず、日本ではグラスは、反戦平和主義者の代表の一人として、一貫して言及されてきた。彼のようなドイツの批判的知識人たちは日本の左派が考える以上にラジカルな現実主義者だったのであるが、そのあたりのずれは両国の作家の対話においても十分には認識されてこなかった。

そこでここでは「核」をテーマに、両国の文学者たちがこの「核」について語り合っているシーンに着目し、そこから見えてくるそれぞれの認識の仕方や重点の置き方の差に注目することで、両国の批判的文学者たちにおける「核」問題の扱い方の違いを明らかにしていきたい。ここで言う「核」とは、原子力発電という「平和利用」と原爆などの核兵器の両方をさしている。原発技術からの核兵器製造の可能性だけでなく、スリーマイル島原発事故や環境問題の深刻化ゆえに両方の「核」を、人類破滅を導く危機とする見方が、ここでとりあげる1980年代からの日独文学者の「核」をめぐる対話では、共有されていたと考えられるからである。¹

日独文学にみる「核」の表象については、たとえばドイツ文学においては川島隆編「カタストロフィ」(『ドイツ文学』第148号)があるが、日本文学との関連で論じられたものではなかった。²その他には、筆者の論文「核の時代のギュンター・グラス～日独文学の対話研究」³がグラスと「核」の関係を、大岡昇平、野間宏らとの対話を中心にした日独文学の比較という枠組みで紹介したくらいである。それに対して本論は、あえて両国の文学者の対話に見られるずれに着目して、そこに見てとれる両国の「核」についての認識の差を分析していく。

本論で取り上げるのは、ドイツのギュンター・グラスを中心に、日本の大岡昇平と野間宏、小田実、そして大江健三郎である。グラスと大岡は戦後40年を記念して行った往復書簡で、戦争と戦後について語り合い、グラスと小田ならびに野間は、小田が西ベルリンに滞在していた1986年に日独文学者の対話で顔を合わせている。またグラスと大江とはすでに1978年にグラスが来日したときに対談し、その後も対談や往復書簡で交友を深めていた。⁴5人とも基本的には反原発・反核兵器の立場を共有し、それぞれの国において批判的知識人とみなされてきたが、ここでは彼らの「核」に対するスタンスにはやはりずれがあることに注目した。グラスを軸にした交友に着目するのは、彼が

もともと「核」の平和利用には一定の理解を示していたのが、80年代以降、西ドイツへの核ミサイル配備や自宅の近くでの原発建設計画を契機に、原発も含めた反核運動を市民の立場から展開し始め、ときに緑の党に歩み寄り、政府の「核」政策にも影響を及ぼしていったと考えられるからである。ところが、「核」についての言動が多くあるグラスだが、彼の先行研究においては「核」との関わりで、日本との比較考察をする研究は見当たらないし⁵、一般にもグラスと日本の作家たちとの交流については知られていない。そこでここでは、こうした日独文学の対話に着目し、以下、グラスを中心に「核」と文学の関係を比較考察し、日本の文学におけるグローバル化する危機に対応しうる文学表現の可能性を探ることとする。

2. グラスと「核」～超域性・超党性・超時性

グラスは当初、原発にも理解を示していたが、やがてグローバル意識を得て、核兵器ともども原発にも反対するようになった。そのグラスの小説『頭脳の所産～ドイツ人が死滅する Kopfgeburten oder Die Deutschen sterben aus』(1980年)では、いくつかの物語のレベルが並行して進むという実験的な書き方で、虚構である夫婦のアジア旅行と、グラス本人が映画製作のために映画監督シュレンドルフと一緒に実際に行ったアジア旅行のことが並行して書かれていて、フィクションとノンフィクションが混在している。そのためか、一般には作品評価はよくなかったが、グラスがグローバル意識を一層強めていくきっかけとなった作品としては、再評価されてしかるべきであると考えられる。

ここに登場する30代の夫婦は、アジアで第三世界の貧困を体験するというスタディツアーに参加する。彼らはそれを通して、人口爆発を起こした現代に自分たちの子どもを生むかどうかという夫婦の問題に決着をつけるつもりだった。二人は反ベトナム戦争のデモにも参加した経験を持つ、学生運動あがりの「内省的」になった市民だった。二人とも教師をしており、体制の中で知識人という地位を得ているが、やはり社会の問題に無関心ではいられない。今ではそれぞれFDP(自由民主党)とSPD(社会民主党)の党员だが、原発建設予定地だったブロークドルフのデモにもともに参加したこともある。

二人はアジア旅行に出て、アジアのスラムに身を置き、世界の貧困の実態を体験しようとするが、ツアーガイドが世話した家庭では食料も行き届いている。彼らが見せられるものは、あらかじめ世界の悲惨が真空パックされている現実にはすぎなかった。世界中どこに行っても、現実はこの真空パックという見えない膜でおおわれている。⁶彼らはヨーロッパ的文脈でしか世界を見ることができないという「体験」をして、結局ドイツに帰って来る。帰って来ると今度は、そこに移民の子供たちがドイツの街角にあふれていることに気づくことになる、という物語である。

ここでは、この小説において二人がブロークドルフという反原発の象徴とされた地で、原発反対のデモに参加していたことに注目したい。こうした行動は、学生運動を体験した中道左派知識人にとって珍しいことではないが、この二人がこの後、アジアを旅し世界の悲惨に目を向けることになることを考え合わせると、ブロークドルフという局所的な危機が、より大きな、それこそグロー

バルな連関でとらえ直されることになったと考えられるからだ。彼らがヨーロッパ的限界に突き当たったとき、人口爆発と貧困、第三世界の搾取などとともに、原発自体もグローバルな危機のひとつとしてここに布置されることになる。それに対して、危機を局所化し、周縁に封じ込めようとする社会の傾向は、まさにヨーロッパ中心主義的、あるいは文明的である。したがって、この小説においては、これをグローバルに連動する危機として捉えるために、いったんヨーロッパ的限界を超えなくてはならなかったのである。その意味で、グラス自身がアジアを旅したのも、「頭脳の所産」⁷たるヨーロッパと自分自身を相対化する視点を獲得するためだったとも考えられるだろう。日本に旅し、日本の作家たちと対話を重ねた理由も、そこにあったと推測される。

こうしたグローバルに連動する危機に、いかに文学が対処しうるかという問題が、この後のグラスの意識を悩ませることとなる。人類は自らが生み出したものを自ら制御することができない。つまり、核兵器であれ原発であれ、理性が生み出す闇としての「核」には、作家の啓蒙が効かなくなっているのである。その結果、1980年代初頭にグラスは断筆することにもなった。当時のグラスは、人類が滅亡するかもしれないという状況で小説を書く意味はあるのか、という根本的な疑問を抱いていた。その煩悶の中から書かれたのが、『女ねずみ』（1986年）だった。この小説はグラスが文学の無意味さにさいなまれながら、自らの文学的想像力の限界をなんとか超えようとする試みとして評価できるだろう。これはまさに、人類をねずみの視点から相対化し、人類史を俯瞰しようとする小説だったのである。

たしかに、この小説はその実験的な書き方のあまり、ヨーロッパ的文学手法や価値観を逸脱することとなり、一般の評価はさんざんなものとなった。だが、そうした文学上の破綻こそが、いまだかつてない危機を語りうる文学の可能性を示唆していたとも言えるだろう。ちなみに、この本が出版された1986年にはチェルノブイリ事故という決定的な事件が起こるのだが、これは本が書かれた後のことだったので、そこには反映されていない。

だがその代わりに、ずっと後の福島原発事故のときには、グラスは『ハンブルク夕刊』紙のインタビューに答えて、今回の事故が大惨事だったにも関わらず、その「核」問題もグローバル化する危機の一つにすぎないのだと、述べることになるのである。「私はよりラジカルになった」と題されたこのインタビューは、2011年4月という、福島原発事故直後に行われたものだが、グラスはここで、原発だけが問題であるわけではないと強調している。すなわち、「核」の問題は様々な大きな問題と連動していき、人類全体の滅亡にまで至るのであり、それこそがグローバル時代の危機の本質なのだという認識を示していたのである。⁸

一か所で起きた危機が他の地域に越境していく点では、「核」はまさに超国家的・超域的危機である。またグラスはここで、原発推進のため政治に圧力かける原発ロビイストの存在をやり玉に挙げているが、イデオロギーや政党間の対立というより、ある種の資本主義的論理が政治を動かしていくことに着目して、こうした状況には超党的な対応が不可欠なのだ⁹と示唆していた。またグラスは小説『女ねずみ』で未来における「核」爆弾による人類の破滅を描いていた。人類史の転換点となったのが広島・長崎への原爆投下であったとすれば、来るべき「核」のカタストロフィは人類史の終焉を意味するのである。理性的に考えればわかることが、通じない。それに対して文学の無

力を文学的技法を駆使して描いたのが、この長編作品なのだが、そこでは未来が過去に透かし見られるように描かれていた。過去と未来、現在が同調し重なり合っている状況を描くことで、彼は「核」の問題の超時的な側面にこだわってきたのだ。

このように、核兵器と原発、両方ともに反対するようになったグラスは、反理性的で反啓蒙主義的な「核」の問題に対して、超域的で、超党的、超時的なアプローチで臨もうとしてきた。それでは、一方の日本の作家たちの方はこの問題に対してどのような態度をとってきたのだろうか。超時性については、日本の作家たちも現代との関わりで原爆を扱う作品を書いているので、ここでは彼らとグラスとの「核」をめぐる対話を、超域性と超党性に絞って見ていくこととする。

3. 大岡昇平との往復書簡～超域性の問題

1985年、終戦40周年を記念する『読売新聞』の企画で、グラスと大岡昇平は往復書簡を二信ずつ交わした。⁹大岡はここで、原爆投下がドイツではなく日本だったという点について、人種的な偏見があったのではないかという疑念を呈した。それに対してグラスは、それを特に論点にすることはなかった。この点において、二人の間で「核」の超域的特性への認識の差があったのではないだろうか。

グラスの第一信（8月8日）ではまず、作家として書く理由は戦争で意味もなく死んでいった同年兵たちのためであるとし、その重荷を背負わないで身軽に美に専心することは文学を軽薄で無拘束なものにすると述べる。彼は、原爆投下はアメリカの犯罪だということを認め、原爆が人類の自己滅亡を可能にした点で、ナチスのユダヤ人虐殺と重ねられるとする。その一方で、今や毎年1500万人の子供が餓死していることは先進国が負うべき責任だと主張し、こうした狂気の事態に言葉が武器に世界平和に貢献するのが作家の使命である、特に戦争を引き起こした日独の作家はこの義務を負うべきだと述べる。他方、大岡は第二信で、グラスが世界の危機について述べたことに対して、「これはアメリカ、西欧、ソ連のみなさん方の問題との感じがわれわれにはある」と答えている。同じ文学者として「核」武装に抗議すべきだと思いながら、やはり「黄色人種」「半未開国」としての日本を意識している。

グラスの第二信（8月20日）では、ものを書く状況が根本から変わり、文学の前提たる時間が奪われているとき、文学に意味があるのかと問いかけつつも、やはり広島などを見るにつけ、作家のならないとして、過去を思い出さずにいられない。過去は自分たちにとっては今も生きていて、欺瞞を許さないのだと、述べている。また、日本が次の原爆ターゲットになるのでは、という大岡の危惧については、それはわからないが、その問い自体には意味がない。というのも、どこが最初だろうとも、結局は全地球的な破滅に至るからだとしている。

大岡はこの点について、1985年9月1日にグラス第二信を読んだ後に、「わが黄色人種の国、日本だけへの戦域核使用の可能性あり、とのわが質問ははぐらかされた」〔大岡、1996：484〕という感想を漏らして、グラスが、日本が核のターゲットになるのではないかという自分の問いを「はぐらか」したという風に、このグラスの第二信を受け取っていた。

この原爆投下場所に関するやり取りからは、日独の原爆に対する考え方の違いが垣間見えてくるだろう。大岡は、原爆投下という野蛮に人種差別的思惑が作用していて、投下場所としてドイツではなく、日本が選ばれたのだという思いをぬぐいされなかったのである。彼はその後1987年に、『証言、その時々』の「あとがき」でこの往復書簡に触れて、「この次核兵器の使用されるのは、日本になるのではないか、との質問は半ば自戒の意味があった」として、「グラスのそれに対する返事はそれは第二次の問題とするものであったけれど、1987年6月のヴェネチア・サミットはヨーロッパ中距離核弾道の全廃に同意したが、極東についてはなにもいわれなかった」〔大岡、2014：313-314〕と述べている。ここで大岡が相変わらず「核」問題にも欧米中心主義があるとの自説にこだわっていたことは明らかだ。ところが、同書に収録された「原発の危険に暢気な国民」ではチェルノブイリについてとりあげていて、原発を採用していないデンマークの議会が、対岸のスウェーデンに原発の即時閉鎖を要求したということに触れて、日本国民はこの点において「暢気」であるとしている〔大岡、2014：312〕。原発、原爆双方に基本的には反対だった大岡は、チェルノブイリ事故の起こった後のこの時点では「核」の問題が国境を超えた問題であるとの見方を基本的には抱いていたことがわかるが、原発ではなく核爆弾のことになるとやはり超域的には考えられなかったのである。他方、グラスは原発事故であれ核戦争であれ、たとえどこが最初であったとしても、すぐに越境して文化的・人種的な差異を無意味化してしまうことが、「核」の問題なのであると、一貫して説いていたのだ。

4. 野間宏との対談～グローバル性の認識

これに対して、日本の作家でもっとも「核」の問題のグローバル性を理解していたのは、野間宏だった。大岡とグラスが往復書簡を交わした翌年の1986年、日独の作家・研究者たちが西ベルリンで開催したシンポジウム「日独文学者の出会い」で、野間とグラスは出会っている。

このシンポジウムは当時DAAD（ドイツ学術交流会）の招きで当時、西ベルリンに長期滞在していた小田実によって企画された〔小田、1988：291-302〕¹⁰このシンポジウムに参加したグラスが反核・反原発運動をずっとリードしてきたことは、日本側にも知られていた。ちょうどその4月にチェルノブイリ原発事故が起こり、ドイツ国内でも「核」に対する危機感が広がっていたこともあり、日本側からの参加者だった野間宏は、さっそく原発調査のために西ドイツの原発会社を訪問している〔野間、1988：142〕。

野間はこのとき、ドイツの作家たちとの間に有意義な交流が可能であると信じていた。彼がこの時行った演説の要旨は、以下のとおりである。

『『荒野の40年』、ヴァイツゼッカー大統領の、類ないというべき演説は、極東の日本の上にも輝いている。私は第二次大戦のひふたを切った日本の文学者としてその戦争進行のなかで、日独伊三国同盟を結び、朝鮮、中国、東南アジア、インド、ビルマ、フィリピンなどを侵略し、略奪、破壊した日本の過去を、文学者の戦争責任を問いつづけ、見届け、『ブリキの太鼓』『ひらめ』などの奇想、他の追従を許すことのない強力にして優れた作家グラス氏を囲む文学者と討論をつくしたい。

日本軍国主義とドイツ国家労働者党の違い、その下にあった文学者、インテリゲンチヤ、人民大衆の苦難と狂気の相違を照らし出し、日本文学の創造の根元のところにある一切のものを洗い出し、そこに一片の軍国主義の要素も混じりこむことのない鋭い批判力を備えた文学創造の方法を自分のものとして、日本へ帰りたいと願っている」〔野間、1988：138-139〕。

拙論でもこの点については取り上げたが、このように野間はドイツ人の文学が戦争と真摯に向き合っている姿勢に感銘を受けていたのである。野間は、「私は核戦争によって同じ運命に一つにひっくくられている世界というイメージによって、新しく戦争を描こうと考えている」〔野間、1970：348〕と述べたことがあるように、すでに1960年代から地球規模の核戦争の危険を描こうとしてきた作家だった。¹¹「核戦争によって同じ運命に一つにひっくくられている世界というイメージ」を持っていたところからは、彼にはこれ以前から「核」に対するグローバルな視野があったことがうかがえる。だからこそ、このとき彼はグラスと同様、人類規模の危機に対して日独作家の対話に意義があると、認識できたのである。野間はそればかりか、積極的にドイツの作家たちから「核」問題にコミットするやり方を学ぼうとしていた。核兵器のみならず原発の危険性に対してもいち早く警鐘を鳴らしていた野間はまた、それゆえ、日本の現代作家の中で最も正確に、「核」のグローバルな危機の意味を認識していたといえるのである。

5. 小田実との対談～超党性の問題

西ベルリンでの「日独文学者の出会い」で野間とともにグラスと顔を合わせた小田実の方は、どうだったのだろうか。彼はグラス同様、日独の作家が等しく「敗北という悲惨な経験から」学んだがゆえに担うべき責務を説いてきた。小田はこのような日独作家の「出会い」について、こうまとめている、

「そのおかしくもいまわしい『過去』を『共有』したおかげで、そういう『過去』を持たなければ見えなかったものが見えて来たということがあるというのが、私が西ベルリンに来てさまざまな人と会い、論じ、しゃべりあっているうちに感じたことのひとつだが、それをおたがいつきあわせて考えてみるのが、大きく言えば、世界全体になんらかのかたちで寄与し得ることになるのではないか—私がこの『出会い』を考え出した考えの基本にあるものはそうしたことだった」〔小田、1987：246〕。

このように、過去の共有が日本とドイツの作家に、世界に対して特殊で意味のある視点を与えてきたのであるが、日独の作家はここであらためて対話することで、その自分達に与えられている使命を自覚することになったと、小田はこの「出会い」の意義を説いているのである。

この点については、ドイツ側の代表グラスも同様のことを述べている。「(；グラスは)『戦後四十年、どうして今までこうした企てが日本とドイツのあいだに開かれなかったのか』と感慨を込めて聞き手にむかって言った。いや、彼はまず自分に言っていたようだった」〔小田、1987：249〕と、小田はこのときのグラスの発言について述べているのだが、ここからもグラスと小田が同じ考え方だったことがわかる。

小田とグラスが直接やりとりしたという記録はないが、このように二人が大いに共感しあっていたことは推測される。だが一方で、1988年の西ベルリンでの市民同士の交流である「日独平和フォーラム」においては、小田はさらにこうした日独にも違いがあるということも指摘していた。小田はこのフォーラムでは、グラスではなく、キリスト教民主同盟の政治家と対談を行っているが、そこではドイツが戦争について自らの加害者性を認めざるを得ないのに対し、日本では必ずしもそうではなく、原爆投下もあって、むしろ被害者意識を言いたがる傾向があるとする。

また、それぞれが関わってきた市民運動においても、両者には比較に値する点が多々あるが、ここにも違いが見られる。グラスが社会民主党支持者だったことは知られているが、実は黨員だった期間はさほど長くなかった。むしろ、支持するとはいえ、彼はこの政党を批判的に、支持していたのである。実際、彼はブランド信奉者だったが、シュミットには距離を取っていた。再統一問題やその後の難民法改定による外国人襲撃事件の多発に対しては社会民主党のあり方を厳しく問いただし、同党を脱党し、その後はむしろ緑の党に接近していった。一方、小田実はベ平連を組織した市民活動家として知られていたが、その実は左翼政党寄りと見なされていた。

小田がグラスを評して、「ストーリーテラー」であるとしたのに対して、ベルや自分自身を「ライター」と称していたことには¹²、それなりにこの違いを衝いていたと思われる。グラスが政治活動をしていても物語作家であったことを、小田は見抜いていた。それに対して、小田自身が親近感を寄せるのは、「ライター」の方だ。彼にとっては、生活から創作に至るまですべてが書くことのネタになっていて、書くことも自ずと政治になっていくのである。この物語作者と作家という二人の差異においても、日独の市民運動の質の違いが見てとれるだろう。

ドイツには、グラスのような物語作者が活動できたという点では、「核」をめぐって議論する、政党や党派を超えた市民が広範に存在していたといえる。後に保守党からも原発全廃の提案がなされたのだが、それもこういう成熟した市民の層が厚かったからだともいえるだろう。他方、日本の市民運動の方はどうだろうか。緑の党のような超党的市民運動が根付かなかったことについては、さまざまな論議があるが、ひとつにはあまりに政治化しセクト化しすぎてしまい、保守層の取り込みができなかったこともその要因だったのではないか。緑の党には保守系の人々、元軍人も入っていた。日本でも「核」についての市民運動が、セクト化することなく、第三の道として生活の場に根付いたものであれば、特定の政党への支援団体とはみられず、より幅広い参加者を呼び寄せただろう。

小田は反核兵器・反原発運動を展開してきたが、このようにグラスらドイツの作家が超党的活動を展開できたのに対して、日本の市民活動は小田が意図するほどには超党的な広がりを得られなかった。ちなみに超域性については、小田は小説『HIROSHIMA』（1981年）の中で、原爆開発のための実験で、アメリカ本土で被爆したネイティブ・アメリカンのことを書いているので、彼が原爆を超域的な現象として捉え、「核」の超域性を表現しようとしていたことがわかる。

6. 大江健三郎との対談～歴史認識と超域性

最後は、大江健三郎との関係である。大江は原発に関しては1968年の講演「核時代への想像力」で賛成していたが、後に反原発のスタンスを取った。一方で彼の原爆へのこだわりは、一貫して強かった。1990年にフランクフルトで行われた対談では、グラスが自国の戦争責任について議論する延長線上で、これからの世界に対して敗戦国である両国は南北問題のペースメーカーであるべきだと主張したということについては、拙著でもすでに述べた。¹³グラスは、両国が超大国とは異なる意見を述べることに意味があるとし、両国による世界への貢献は南北問題などグローバル化する問題において重要であると考えた。拙著では、大江もこうしたグラスに賛同していたとはいえ、大江の議論が日本・アジアとの関係にとどまっている点に両者の気質、世界認識の差を見ていた。しかしここでの両者の違いは、彼らの世界を見る視野の広さの問題ではなく、むしろ歴史認識の差の問題だったのではないだろうか。

ドイツはユダヤ人大虐殺という「悪」を認めたことで、人類・文明に関わる議論に加わることができた。もし仮にドイツ人がホロコーストなどの自分たちの罪を棚に上げて、人類・文明の危機を言いたてたとすれば、罪の相対化、戦争責任逃れと受けとられたことだろう。他方日本では、アメリカによる原爆投下という点で被害者意識が強く、自国の戦争責任があやふやにされてきた。そのため、人類・文明の危機という議論には参加しづらくなると考えられる。

それゆえ、「核」の問題については、大江はここではもっぱら広島・長崎原爆投下について述べるにとどまっている。グラスも、アメリカはそれをみずからの犯罪だと認めるべきだとしている。ただ、それで日本の戦争責任が不問に付されるわけではない。日本の場合は、この点でドイツに比べてより複雑な戦争という過去への対処が求められていたのである。大江もドイツと比較して、日本の戦争責任の取り方は不十分であると、ここでは主張していた。このことが、「核」の問題に対する大江ら日本の批判的知識人のスタンスを、結果的により内向きにしていたと言えるのではないだろうか。その意味で大江がここで、まずは自国の戦争責任を追及しなくてはならないと考えたのは、もっともなことである。その前提がないと、より大きな危機の議論に主体的に関わることは難しいからである。

ドイツでは「アウシュビッツ」ゆえに、悪を内から出てきたものと認めざるを得なかった。それゆえに、「核」に対しても内省的になれた。他方、日本では「ヒロシマ」ゆえに、被害者意識が先に立ち、「核」を外からきた悪とみなす傾向があった。「フクシマ」で内なる「核」が多大な被害を及ぼしたにもかかわらず、それを局所的な問題に封じ込めようとする傾向も否めない。そして経済効率の面で許容され、原発が再稼働されつつある。大江がこの対談で言及している「みそぎ」という言葉が象徴するように、絶対悪は外にあり、それに対してピュアなる自分を守らなくてはならないという構造が、日本では文化的にも根強く存続しているようだ。

この「核」の議論において日本の作家から根本的に抜け落ちているのは、とりわけ原発の「核」の被害が自分たちの思惑を超え、国境を超えて広がりうるという点であり、大江もその例外ではなかったものと思われる。自分たちが生み出したはずの「核」は自分たちでもコントロールできない

がゆえに、それを特定の地域に押しとどめることもできない。ところが、アメリカ軍人の被爆や放射性物質の公海への流出・拡散などに、日本は対処しようとしているのだろうか。そうした問いが、日本の文学者からはあまり聞こえてこないのである。

このように、日独の間でもっとも深い親交があるとみられるグラスと大江との「核」をめぐる対話でも、両国の過去との取り組み方を反映して、超域性の認識にずれが生じていたのである。

7. おわりに

以上、本論は日独の文学対話から「核」問題を比較考察してきた。ここで取り上げた日独の文学者たちは基本的には原発と核兵器の双方ともに反対だったが、それとの取り組みには差異が見られた。筆者はここで、日独の作家たちがこの「核」について語り合うシーンに着目し、ギュンター・グラスを定点として互いの認識の仕方や重点の置き方のずれを見ていくことで、両国の批判的知識人たちに見られる「核」問題の扱い方の違いを明らかにしてきた。グラスと大岡、大江との対話からは「核」の特性である超域性が、小田との対話からはその超党性が、それぞれ日本人の意識において脆弱だったことが明らかになった。すなわち、日本の作家たちは、ドイツに比べ日本の市民意識が未成熟だったがゆえに、党派的になり、また戦争の責任に関してより複雑な問題にとりくまざるをえなかったがゆえに、一層内向きになった。そのため、日本の作家たちは「核」問題の特性である超党性と超域性を十分に表現しえなかったのだ。

言い換えれば、日本の批判的意識を持つ作家は、「核」自体のグローバルな特性を理解するとともに、市民性の育成と歴史認識の徹底をしていかななくては、グローバルな危機としての「核」を十分に表現することはできないだろう。実際日本では、「核」問題に対して当事者意識より被害者意識が先に立ち、市民運動においても原発問題を国内の政治問題に局限してきたのではないか。被爆国として「核」についてよく知っている、市民活動も活発だという思い込みが、批判的意識を持つ作家たちにおいてすら免れず、そうした現状認識を阻んできたと推測される。ここでは、ドイツの作家との比較を通して、このことをある程度は明らかにできたのではないだろうか。

注

- ¹ 日本における原爆と原発の言説の分析として、山本昭宏は『核エネルギー言説の戦後史1945-1960～「被爆の記憶」と「原子力の夢」』（人文書院、2012年）で、戦後日本では「被爆の記憶」と「原子力の夢」の間で揺れながらも結果的に原発推進が揺らぐことはなかったが、1970年代後半から80年代前半にかけては核の「平和利用」への批判が高まり、反原爆とともに反原発の動きがあったと述べている。ただ、原発も「核」の脅威とするこの時代の日独における意識の変化にはまた、日本との関わりも深い哲学者のギュンター・アンダースや、国際的な環境運動のパイオニアであるロベルト・ユンクラが1970年代から日独の批判的知識人の間で読まれていたことも影響していただろう。例えばグラスは、核兵器であれ原発であれ、核エネルギーが文明の断絶であることを、この二人が自分に示してくれたと述べている（ギュンター・グラス（依岡隆児訳・解説）「私はよりラジカルになった」『文学界』2月号、2014年）。
- ² 日本独文学会『ドイツ文学』第148号、郁文堂、2013年。ここでは、「フクシマ」についてドイツのマスコミ報道の偏重を指摘している。たしかにこの報道がドイツ人における反原発への転換に影響があった

と考えられるが、そればかりではなく、それを受け入れる世論がすでにその前からあったことがこの転換を後押ししたとも言えよう。その世論形成には文学も大いに寄与していたのである。また、「フクシマ」に影響されて書かれたドイツの作家たちの作品は、「核」が「目に見えない」ため、それを「可視化」することを試みたものだと解釈しているが、「核」の特異性は見えないことではなく、むしろ見ようと思えば見えるのに、それに有効に抵抗できないという点にあるのではないか。問題なのは、「核」が「啓蒙」の挫折、ひいては人間自身への絶望の表象となっている点だろう。

³ 依岡隆児「核の時代のギュンター・グラス～日独文学の〈対話〉研究」、『言語文化研究』第20巻、徳島大学総合科学部、2012年

⁴ グラスは1978年に日本を旅行したとき、大江健三郎と対談し、その後、90年に再び今度はフランクフルトで対談した。参考、「ドイツと日本の同時代—多様性・経験・文学、大江健三郎／グラス対談」『群像』1991年1月特大号（90年フランクフルト書籍市10月4日）。さらに95年には『朝日新聞』で終戦50周年を記念して、二人は往復書簡を交している。

⁵ 梓洲博樹『ギュンター・グラス『女ねずみ』—人間滅亡のリアリティと「原子力時代」の文学—』（早稲田大学出版部、2011年）は、グラスと「原子力時代」の文学というテーマで、『女ねずみ』を詳細に分析しているが、それを日本との関わりで論じているわけではない。

⁶ 筆者はこの小説において登場人物が旅に持参していくレパソーセージについて、これが「真空パック」されていたという点に着目し、それがリアルな現実への遮蔽膜となっていることを指摘した。そして現実の悲惨に対する認識が、現実がこの遮蔽膜を通してしか見られないゆえに妨げられていると、解釈した。参考、依岡隆児『ギュンター・グラスの世界～その内省的語りを中心に』、鳥影社、2007年

⁷ ギリシア神話で女神アテネは、ゼウス神の頭から生まれたとされている。これを受けて、グラスはここで「頭脳の所産」をヨーロッパ文明と関連付けている。

⁸ グラス「私はよりラジカルになった」、前掲書

⁹ この往復書簡はドイツでは、Hermes, Daniel / Neuhaus, Volker (Hg.): Günter Grass im Ausland. Darmstadt und Neuwied 1990.に収録されている。

¹⁰ 小田実は「ベルリン芸術家プログラム」主催で「日独文学者の出会い」というシンポジウムを開催した。日本から野間宏、李恢成、伊藤成彦、石田雄、小田、ドイツからはギュンター・グラス、F.C.デリウス、インゲボルク・ドレービッツ、ヴァルター・ヘレラー、ジークフリート・シャルシュミットが参加し、1986年5月8～9日には西ベルリンで、同年5月10日にはカッセルで行われた。

¹¹ 依岡、「核の時代のギュンター・グラス～日独文学の〈対話〉研究」、前掲書

¹² 小田実はいんりヒ・ベルとの比較でグラスのことを、「ライター」ではなく「ノウペリスト」「ストーリーテラー」だと呼んだ。ベルのように政治も生活もすべてを作品の中にごめて書くのが「ライター」だとすれば、グラスは政治活動とは別に物語を紡ぐことに重きを置くからである、とする。小田本人はグラスよりベルのような「ライター」が日本には少ない。自分はこの「ライター」でありたいのだと述べている（小田、1993：357）。参考、依岡、「日独文学の〈対話〉～ギュンター・グラスと小田実との関係を中心に～」、『言語文化研究』第23巻、徳島大学総合科学部、2015年

¹³ 参考、依岡隆児、『四国グローバル～日本とドイツの文化交流から』、リーブル出版、2015年

参考文献

大江健三郎『大江健三郎往復書簡 暴力に逆らって書く』朝日新聞社、2003年

大岡昇平『大岡昇平全集』第22巻、筑摩書房、1996年

大岡昇平『証言 その時々』講談社、2014年（初出：筑摩書房、1987年）

小田実『西ベルリンで見たこと 日本で考えたこと』毎日新聞社、1988年

小田実『西宮から日本、世界を見る』話しの特集、1993年

野間宏『野間宏全集』第4巻、筑摩書房、1970年

野間宏『野間宏作品集』第14巻、岩波書店、1988年

Grass, Günter: Kopfgeburten oder Die Deutschen sterben aus. 5. Auflage. Darmstadt und Neuwied 1984.

Grass, Günter / Oe, Kenzaburo: Gestern, vor 50 Jahren. Ein deutsch-japanischer Briefwechsel. Göttingen 1995.

(徳島大学)